

【書評】

田中耕治編著「総合学習」の可能性を問う —奈良女子大学文学部附属小学校の「しごと」実践に学ぶ— (ミネルヴァ書房、1999年12月発行、242ページ、2800円)

鳥取大学 山根俊喜

学習指導要領の改訂で「総合的学習の時間」が設けられたのを前後して、「総合学習」「総合的学習」をタイトルに冠するおびただしい数の書物が発行されている。ある書籍検索ソフトで検索すると、ここ5年間で、100冊以上現れてくる。こうした「総合学習」関係書籍の多くは、その理論や実践に関する手引き書・啓蒙書、実践の紹介・報告・事例集、実践のアイデア集である。こうした類書から本書を区別する特徴は、総合学習の歴史、理論と実践を対象化して、総合学習に対する批判を強く意識しながら教育方法学の視点から分析し、総合学習の可能性とその成功のための条件を明らかにしようとした意欲的な著作であるという点である。分析の対象とされているのは、奈良女子師範学校附属小学校の合科学習、奈良女子大学文学部附属小学校の「奈良プラン」(「しごと」：総合学習、教科に対応させれば社会そして理科、「けいこ」：社会、理科以外の教科学習、「なかよし」：教科外活動の3領域から成る)における「しごと」領域の実践である。これが、「教科学習の『総合性』には解消されない『総合学習』の『総合性』を認めた上で、両者の『相互還流』を構想しようとする立場」から分析、考察されている。

構成は以下の通りである。

序章 「総合学習」の今日的課題とは何か

第1部 「奈良の学習法」の史的展開：第1章 「奈良の学習法」の登場—木下竹次を中心として—/第2章 後期「奈良の学習法」の樹立—重松鷹泰による「奈良プラン」の創造/第3章 長岡文雄実践にみる教師の指導性

第2部 「しごと」実践の現在：第4章 授業分析Ⅰ 「気になる木」の「はっぱ」をふやそう—おじいちゃん、おばあちゃん大研究/第5章 授業分析Ⅱ 万葉人の世界を探ろう—平城京展を見て—/第6章 奈良女附小の「しごと」実践を聞く

終章 総合学習における教育評価

序章を編者が、各章を若手の大学院生6名(執筆当時)が執筆している。明記してはいないが、著者たちの共同研究の成果でもある。以下、内容を、若干のコメントを交えながら紹介する。

まず、序章では、総合学習を志向する実践の理論的背景がまとめられた後、総合学習を巡る争

点が歴史的論争の検討によって明らかにされ、最後に、総合学習がカリキュラム研究や授業研究に対して提起している課題が、①「体験」「直接体験」の意義、②課題の総合性と方法知の学習、③表現を基礎にした評価、という3つの点からまとめられ、同時に以降の実践分析の枠組みとして提示されている。とくに②では、学習を「learn（習得的な学び）」と「research（研究的な学び）」に質的に区分し、教科学習は「learnからresearch」へ展開し、総合学習は「researchからlearn」を捉え直すものとされている点が興味深い。

次に、第Ⅰ部の各章では、戦前から現在に至る、合科学習と「奈良プラン」の歴史が、木下竹次、重松鷹泰、長岡文雄というキー・パーソンの理論と実践の分析を通じて明らかにされている。第1章では、木下の学習法理論、訓導たちの「合科学習指導要綱」、木下の教育目標－評価論の分析が行われ、「生徒の総合的発達を保障するための目標設定や評価のあり方や学習指導において子どもの自律性を引き出す方法や集団の積極的役割を理論化した」点を評価し、「その反面視野から後退せざるを得なかった知識の側面が子どもの自律性に任せておいてどこまで保障できていたのかという点」の検討が今後の課題とされている。書の構成上致し方ないのかも知れないが、木下研究の到達点、また課程主義、中等学校受験といった外からの要求という当時の状況、さらに次章との関連という点から、今後の課題とされた点をもう少し論究してもらえればと思った。

第2章では、重松鷹泰による「奈良プラン」の理論的分析が行われ、合科学習における学習領域の「広がり」と学習活動の「深まり」の両立困難性を、「しごと」に加えて「けいこ」を「独立した」領域として設け、前者は共同で、後者は自分の力でとりくむとしたことによって解決し、「自ら学ぶことと共同して探求することについての深い経験、その能力の十分な発揮発展と広く総合的な能力の保障のいずれをも『たしかな』ものにしたと高く評価できる」としながら、「しごと」の母学問である社会科学や自然科学の系統的継続的「けいこ」が必要ではなかったかとしている。前章との関係で、このプランで大合科→中合科→小合科というカリキュラム論がどう止揚されたのかについて知りたいと思った。第3章では、「しごと」の学習における子どもの自律性、自主性を可能にする教師の指導性のあり方を、1943年から79年までこの学校に在職した長岡文雄の実践、とくにそのテーマ設定と指導過程の分析を通じて明らかにしている。なお、序章では、1960年代「現代化」の中で「しごと」が「小型化している社会科」「マンネリ化」に陥り、1970年代に再度「しごと」の意義が確認され、同時に「けいこ」の指導が「具体的なもの」の積み重ねから「帰納的、発見的に理解」させるものとされ、「『しごと』と『けいこ』の統一的な理解」がはかられた」とされている。無い物ねだりだとは思いますが、長岡の実践に即して、重松の「奈良プラン」からの発展過程を知りたいと思った。

この第Ⅰ部をふまえて、第Ⅱ部では、現在の「しごと」に関する実践分析と、実践者と執筆者たちの討論のまとめが行われている。まず第4章、第5章では、それぞれ、4年生星組担当の木幡先生の「おじいちゃん、おばあちゃん大研究」というテーマ、6年生星組担当の廣岡先生の「万葉人の世界を探ろう」というテーマで行われている「しごと」の、実践全体を概観した上で

の1単位時間の授業分析が行われている。両者とも教科でいえば社会科をベースにした「しごと」実践である。前者では、子どもたちが「気になる」ことを増やそうという活動の中で、物事の広がりや深まりを共同で探求していく過程が、「表現→思考→追究」の連続という形で取り出され、この活動を成立させている指導のあり方が、主に教師の発言の質的分析や板書法などの授業運営法、教育評価という視点から分析されている。後者では、歴史への理解とともに、「自分なりの『歴史への問い』をもち、楽しみながら歴史を探究する力を育てる」ことを目標としている広岡先生の授業が、①なぜ総合学習として行われているのか、②子どもの主体性、能動性を可能にする教師の指導性、という2点から分析され、さらに、総合学習における「総合性」と教科学習における「総合性」の特質と関係が考察されている。そこでは、廣岡実践は、この二つの「総合性」を含み持つ「混合体」ではあるが、教科の「総合性」を基盤として、そこから総合学習の「総合性」へ移行するという方向性を持つものと分析されている。第6章では、両先生の総合的な理論知、実践知がその著作の分析から明らかにされ、同時に、著者たちの実践分析の結果を基にした、両先生との討論会のまとめが行われている。ここでは、「総合学習（『しごと』）は教科学習（『けいこ』）と補完的な位置づけを与えられるべきだ」「『社会科』が本来保障すべき系統的な知識が、『しごと』だけでは断片的にしか与えられない可能性があるのではないか」といった著者たちの率直な見解に対する応答が掲げられており興味深い。なお、この第2部では読み進めばある程度分かるようになってはいるが、現在の奈良女附小の全体的なカリキュラムや基礎データ——たとえば「けいこ」に含まれる教科はなにか、とか、学年持ち上がりなど——戦後初期の「奈良プラン」との異同があらかじめまとめられていれば親切かと思った。

最後に、第2部の各章で取り上げられてきた総合学習の教育評価の問題が総括され、「表現を基礎にした評価」、なかでもポートフォリオ評価法を総合学習にとり入れた場合の、実践の可能性の広がりやが考察されている。

最後に感じたことを2点記しておく。小幡先生が、一般論として「教科がlearnからstudy、つまりテーマ研究にまで発展していったら、すごい実践だと思う。今はそこまでいっていないから教科の方が問題なのであろう」と発言されている。習熟段階の指導の理論的実践的な不備を衝いた発言だが、翻って、特定の能力を「系統的」に鍛え上げるとされる「けいこ」における「総合性」がどのように捉えられ、実践されているか、その上で、「しごと」の「総合性」とどのように「相互還流」しているのか（あるいはしていないのか）が知りたいと思った。また、本書で取り上げられている、「奈良プラン」における「しごと」領域の総合学習は、社会科をベースにしている点で、learnとresearchが往還しており、learnからresearchへ、researchからlearnという両方向の関係、あるいは教科における「総合性」と総合学習における「総合性」の間の関係それ自身は問わなくてもよい構造になっているとも考えられる。その意味で、「諸教科」と「総合的学習の時間」の「相互還流」のあり方の典型を取り出すには他の対象設定が必要ではないかと感じた。この点については、現在取り組まれていると聞くので、その成果を大いに期待している。